

卓球授業の一実践

— スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を得ることを目指して —

神戸大学発達科学部 秋元 忍*

A Practice of Table Tennis Class: Toward the Development of Imaginative Faculty for Future of Sport Culture

Shinobu AKIMOTO

Faculty of Human Development, Kobe University

キーワード：スポーツ実習，現代史，卓球

Key Words : Sports Practice, Contemporary History, Table Tennis

1. はじめに

1. 1. 研究の目的・意義

本稿の目的は、大学におけるスポーツ実践^{註1)}の現代史を、筆者が担当した卓球授業を事例として素描することである。具体的には、この卓球授業がいかに展開されたのかを再構成することから、大学におけるスポーツ実践の現在の一側面を照射し、その今後のありようの展望に資することを志向するものである。

本稿の動機となったのは、大学におけるスポーツ実践の必要性に対する疑問である。この疑問は次の2つの観点から導かれた。

1点目は、体育・スポーツ史研究の知見から提起される疑問である。近代日本の大学の場合、体育が必修化されたのは、国がその必要性を認めた時のみであった。今日、必修教科としての大学体育の危機が叫ばれているということは、その必要性がほとんど認められなくなったことを示唆しているように思われる。「戦前の軍事予備教育、あるいは戦後の民主主義教育への貢献に匹敵する程の必要性、換言すれば国の側からの期待」²⁾とは、一体何であろうか。また、地域を日本に限らずとも、遊び、気晴らしであったスポーツが教育の場に取りこまれ、その手段となったのは、そもそも近代社会に固有の出来事にすぎない。大学の中で行われるという状

況は、普遍的なスポーツとの関わり方ではない。

2点目は、大学におけるスポーツ実習科目担当者としての経験から浮かんでくる疑問である。スポーツ実習科目ではスポーツに見出された教育的価値が教授される。その価値とは、健康の維持および増進、身体への気付き、コミュニケーション・スキルの向上などと主張されるものである。しかしこのことは、肯定的な面のみならず、本来教育とは異なる文化であるはずの、スポーツの本質的理解を困難にしている面もあるように思われる。大学という教育機関で実践される限り、スポーツは教育の手段の域を出ない。筆者が担当してきたスポーツ実習科目の受講者の感想には、「スポーツとは楽しむものだ」という意味の言説がしばしば見出されるが、教育目標達成のためのスポーツの手段化に潜む矛盾は、受講者にも自覚されているのではないか。

では、大学におけるスポーツ実践、中でも授業としてのスポーツ実習科目は何を目指すべきなのか。周知のように、この問いは決して新しいものではない。これまでにも、大学体育、あるいはスポーツ実習科目に関する教育研究については多くの成果が蓄積され、現場に還元されてきた。これらの成果に対し、本研究は理想的授業モデルの提示を目指すものではない。しかし、その存在理由が問われる中で、いかにスポーツ実

*旧所属：九州大学大学教育研究センター

習科目が教授されたのかを記録していく作業は、今後の大学におけるスポーツ実践のあり方を考える際の1つの材料を提示するだろう。将来の展望は、過去の批判的検討によって拓かれるからである。また本稿は、歴史研究者としての、乖離しがちな授業と研究の融合化の1つの試みでもある。

1. 2. 研究の課題と対象

上記の目的を達成するため、本稿では、筆者が担当したある卓球授業の試みを、以下の4つの観点から再構成することを課題とした。1) 授業目的はいかに設定されたのか、2) 授業はいかに展開されたのか、3) 受講者はいかに対応したのか、4) 受講者はこの卓球授業をいかなる実践としてイメージしたのか。最後に、大学におけるスポーツ実践の必要性という観点から、歴史的事実としてのこの実践を評価した。

本稿で事例として取り上げたのは、九州大学全学教育「健康・スポーツ科学科目Ⅱ」の1領域である「身体運動実習Ⅱ」の「卓球」である。2002年度前期に開講され、受講者数は38名（男性24名、女性14名）であった。実施場所は九州大学六本松地区体育館であり、一度に15台の卓球台が利用可能であった。

2. 卓球授業の再構成

2. 1. 授業目的の設定

九州大学全学教育科目には「健康・スポーツ科学科目Ⅰ」と「健康・スポーツ科学科目Ⅱ」が開講されている。Ⅰ、Ⅱともに実習、講義からなっており、前者は必修、後者は1年次後期からの選択科目である。「健康・スポーツ科学科目Ⅱ」の目的は、「様々な身体運動やスポーツを継続的に実施することの意義について学び、『身体運動の生活化』を図っていくこと」¹⁾とされている。

健康・スポーツ科学科目Ⅱの各授業は、全体の目的に適合的な、個別の目的を設定することになる。筆者はこのすり合わせを以下のように進めた。受講者が大学卒業後スポーツといかに関わっていくかを主体的に考えていくためには、そもそもスポーツとはいかなる文化なのか、という深い理解が不可欠である。そしてそのためには、単に消費の対象としてではなく、一度自分たちのものとしてスポーツを取り戻す必要があるのではないか。こうした体験によって、いわゆる近代スポーツの歴史的位置を理解し、スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を得ることができるのではないか。

以上を踏まえ、筆者はこの授業の目的を「スポーツの歴史被拘束性を実践の中から理解し、その主体的な

継承のための構想力を育むこと」とした。

身体運動の生活化を目指すという健康・スポーツ科学科目Ⅱの目的は、大学におけるスポーツ実践の必要性をめぐる議論の歴史の、1つの表象であろう。同時に、授業担当者である筆者は、その歴史の中に現在生きている。授業はこうあるべきだという考え方は筆者の主観だが、その主観は不可避免的に歴史に規定される。このような二重の拘束性の中で、授業目的の設定は行われた。

2. 2. 授業の展開

この個別の授業目的を達成するため、授業の展開は以下の表1のように設定された。全体の構成は、6時間目までの前半部と、それ以降の後半部からなっている。

表1 授業の展開

時間	テーマ
1時間目	履修のガイダンス 卓球の歴史
2時間目	ボールに慣れる
3時間目	コースを打ち分ける（ロング、ショート）
4時間目	回転をかける（ドライブ、スライス、サイドスピンの）
5時間目	様々なストロークをマスターする
6時間目	シングルス、ダブルスのルールを理解する
7時間目以降	「卓球を楽しむためのプログラム」の計画と実施

前半部は、近代スポーツとしての卓球を体感することを意図した。卓球の基本的な技術を習得し、競技としての卓球の技術がいかに体系化され、ルールが整備されているかを、上記のテーマごとに学ぶ。卓球、そして卓球を含む近代スポーツの歴史にも言及しながら、既知のスポーツとしての卓球が、いかなる歴史的位置にあるのかを学習できるよう促した。

後半部は、クラスを5つの班に分け、班ごとに「卓球を楽しむためのプログラムの作成」に取り組んだ。従来のスポーツのあり方にこだわらず、実際にスポーツ実践の場を創造することによって、スポーツへの主体的なかかわり方を考えていくための構想力を得ることをねらいとした。

7時間目以降の、受講者による「卓球を楽しむためのプログラム」の計画と実施は、次のように進められた。

- 1) 1回75分のプログラムを班ごとに作成、実行する。プログラムの受講者は、担当班のメンバー以外の受講者とする。ただし、担当班のメンバーがプログラムに参加してもよい。
- 2) 終了後、受講者全員からその内容を評価してもらう。各班で評価を受けるためのアンケート表を作成

身体運動実習Ⅱ (卓球)

担当教員: 秋元 忍

(大教センター講師)

研究室 保健体育教育室(本館1階)

In

E-mail

テーマ: 卓球を楽しむプログラムの作成と実行

Plan (計画) → Do (実行) → See (評価) → Feedback (改善: 期末レポート)

1. 5グループに分かれ、一回75分のプログラムを作成、実行する。
2. 終了後、受講者全員からその内容を評価してもらう。→アンケート表の作成
3. 貢献度をもとに、グループ内でもメンバー相互の評価を行う。→評価表の作成
4. 受講者のアンケートの集計、分析をもとに、学期末レポート提出

評価の方法

出席: 60点 (5点×12回)

グループ内評価: 20点

レポート: 20点

受講者データ 人数: 38名 (男24人、女14人)

・実施当日の仕事の流れ

- ①遅くとも開始15分前には卓球場に到着
- ②グループで最終打ち合わせ
- ③会場準備、用具、資料等のチェック
- ④開講あいさつ: さわやかに、笑顔で自己(グループ)紹介
- ⑤プログラム内容のテーマ説明
- ⑥準備運動・ウォーミングアップ
- ⑦必要に応じてグループビンゴ
- ⑧プログラム実施 (説明→デモ→質疑応答→グループビンゴ→実施→結果発表)
- ⑨まとめ、受講者アンケート実施、回収
- ⑩閉講あいさつ、受講生解散
- ⑪グループでまとめのミーティング (アンケート集計、グループ内評価の方法)

・最終授業日までの流れ

- ⑫アンケートの集計結果のまとめ
- ⑬グループ内評価の実施と点数化 (各グループ毎に評価表を提出)
- ⑭アンケートの集計結果のグラフを各自添付の上、レポート提出 (2000字程度)

・プログラム評価 (アンケート) の主な観点

プログラムの内容について/担当者について/記述式質問、等

図1 実施当日の作業の流れ, 授業終了日までの作業の流れ

する。

- 3) 残りの15分を使い、筆者と班のメンバーで事後ミーティングを行う。
- 4) 貢献度を基準に、班内でもメンバー相互の評価を行う。適切な評価を行うための評価表を、各班で作成する。この評価は20点満点とし、成績に反映させる。評価の項目は各グループで作成する。
- 5) 受講者のアンケートの集計、分析をもとに、学期末レポートを作成する。この検討の結果を、次のより良い実践へとフィードバックする。

プログラム作成のための説明の際には、必ずしもこれまでの卓球という枠にとらわれる必要はないことを強調し、独自の実践の場の創造を促した。

説明のために以下の事項を記載した資料を配布した。それらは、実施当日の作業の流れ、授業終了日までの作業の流れ (図1)、グループメンバーリスト、プログラム記入表、グループ内評価表ひな型、アンケート用紙ひな型、アンケート作成のための参考資料 (大学の授業評価表) であった。

その後、8~13時間目までの5時間を、1班から5班の順で、プログラム実践の時間とした。実践の当日には遅くとも授業開始15分前には集合し、筆者と事前

プログラムの キャッチコピー	穴に落ちるな! 四角です! ③	
プログラムの趣旨	卓球の新しい形を提案。 みんな楽しんで!!	
内容	時間配分	ポイント
1. あいさつ	/	さわやかに
2. ラジオ体操	10 (60)	みんなの童謡に まどろっこし
3. グループ分け	2	8人程度の グループ
4. ルール説明と ① 説明コーナー	10	① 穴に 4つの卓球台を くっつけてい
5. 練習	10	卓球の穴には球を落とす いけません 球を落とすのは、卓球と一緒で ミスをした人は、球を落とす ミスです。
6. ゲームSTART	15	ゲームは2人ずつ まわしていき
7. 決勝戦	15	ゲームは2人ずつ まわしていき
8. 片付け、 アンケート	10	① 穴から ② 穴から ③ 穴から
9. アンケート回収	/	15分間に アンケートを 回収する
10. あいさつ	/	

図2 1班のプログラム記入表

1 班

アンケート用紙

本日はプログラムへのご参加ありがとうございます。次のアンケートにご記入願います。

男 女

はじめに

卓球経験者ですか? はい・いいえ

授業について

	非常に良い	良い	ふつう	やや不良	非常に不良
1. キャッチコピーはどうか?	5	4	3	2	1
2. ラジオ体操を取り入れたことについて、どうか?	5	4	3	2	1
3. ルールはきちんと理解できましたか?	5	4	3	2	1
4. このルールの新鮮度は?	5	4	3	2	1
5. 音楽をかけたというアイデアはどうか?	5	4	3	2	1

1 班

アンケートの続き

担当者について

	非常に良い	良い	ふつう	やや不良	非常に不良
1. 分かりやすく、スムーズな進行ができていましたか?	5	4	3	2	1
2. 笑顔で対応できていましたか?	5	4	3	2	1

全体を通して

	5	4	3	2	1
1. 今日は楽しめましたか?	5	4	3	2	1
2. 運動しながら聞きたい音楽はありますか?					
3. 改善すべきと思う点があれば書いて下さい。					

ご協力ありがとうございました。

図3 1班のアンケート表

ミーティングを行い、完成したプログラム記入表のコピーを提出させた。

計画に従い、各班はプログラムを実行した。そして終了後直ちに評価を受けた。図2は1班のプログラム記入表、図3は1班のアンケート表である。図4、図5は3班男性のアンケート集計結果、グループ内評価表である。受講者が作成したこれらの図は、プログラムが実行されたことのできる確かな証左である。

2. 3. 受講者の対応

提出されたレポートやプログラム実施表等を史料としながら、前半部と後半部に分けて、受講者がいかにこの授業に対応したのを見ていく。

1) 6時間目までの前半部

受講者にとって、スポーツの技術を体系的に習得し、同時に正式とされるルールを学んでいくという構成は、目新しいものではないだろう。「前半の講義は経験者にとっては余裕のある内容だったが、友達にコツを教えてあげたりして、楽しむことができた。」(2年・男性) 技術の向上に伴う喜び、ゲームの楽しさに言及した受講者は多かった。「実は、何となく卓球を選んだのだが、実際授業を受けてみて、今まで知らなかったうち方を学び、やっていくうちに速いラリーができるようになったりと、技術面はかなり上がったように思う。」(2年・男性)「正直退屈なときもありましたが、いろんな強さの人と卓球ができ、結構刺激を受けたし、

自分のレベルはまだこんなものかと気付かされました。」(2年・男性)

ただし、技術が体系化され、ルールが統一化されていることの意味についてまで、前半部の段階で思い至ることは少なかったようだ。卓球の歴史や、いわゆる近代スポーツの成立過程については1時間目に触れた。だが、前半部の実践を、スポーツの歴史被拘束性の理解へとより強く結び付けたのは、後述するように後半部の実践であった。

2) 7時間目以降の後半部

計5つの班に分かれた受講者は、7時間目からプログラムの作成を開始した。まず自己紹介を兼ねて、グループメンバー表を作成した。その後、班内でアイデアを出し合いながら、プログラム記入表に計画を具体化していった。この7時間目の授業時間内のみでは計画をまとめることは困難であるため、多くの班が授業時間外にも話し合う機会を持った。

各班が作成したプログラムのキャッチコピー、趣旨、概要は表2の通りであった。キャッチコピーは、趣旨をわかりやすく伝えるために実施当日の黒板に大きく板書されるものである。実施しようとする内容と、そのコピー、趣旨とが合致していない案も見られたが、あくまで班のメンバーの話し合いの結果に委ね、事後ミーティングまで指摘しなかった。

計画段階の各班の対応は以下のように語られていた。

<アンケート集計結果>

回答者数23名（男性10名、女性13名）

1. 回答項目（5点満点で採点。）

- プログラムは楽しめたか。
- プログラム、ルールの説明はわかりやすかったか。
- プログラムの進行はスムーズであったか。
- プログラムに興味、関心が持てたか。
- プログラム実行員の声は聞き取りやすかったか。

2. 集計結果

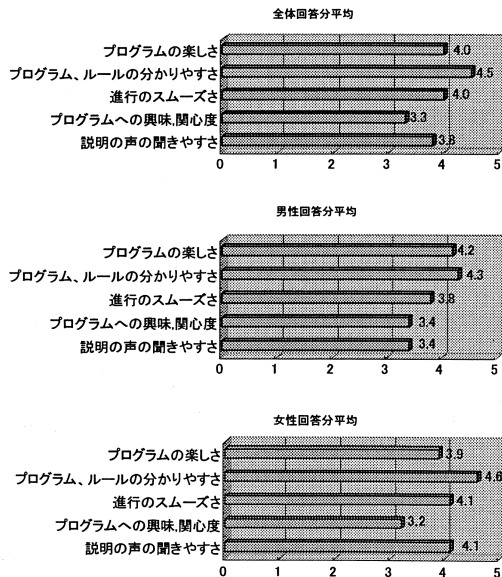


図4 3班男性のアンケート集計結果

3班

グループ内評価表

名前	
1. 協調性	4/5
2. 積極的発言力	5/5
3. 行動力	5/4
4. マジ気(情熱)	4/5
評点	18 / 20点

図5 3班男性のグループ内評価表

表2 プログラムのコピー、趣旨、概要

	1班	2班	3班	4班	5班
コピー	穴に落ちるな！ 四角でボン	弱肉強食	Let's Ping-Pong	ピンポンダッシュ	走る卓球—カバー
趣旨	卓球の新しい形を提案 みんなで楽しもう！	バトル	経験者から未経験者までが飽きずに楽しめるようにする	楽しくコントロールを身につける	経験の差をなくして思いっきり楽しむことは可能か？
概要	卓球台を4つ組み合わせ、中心に穴を作り、そこにボールが落ちないようにするゲーム。ネットは張らない。卓球自体のルールは通常のゲームと同じ。ミスをすれば、その台に打ってきた人の得点とする。経験者、非経験者の差をなくすことがねらい。	ダブルスのアップダウンゲームを行う。何度か順位の交換が続いた後に、台ごとにシングルの総当たり戦を行う。通常の卓球で、同じ程度のレベルの人と真剣に卓球を楽しめるようにすることがねらい。	通常の卓球のルールで、ストローク別の技術練習の後、トーナメント方式のゲームを行う。1～6回目までの授業で習得した技術を活用しながら、真剣勝負の中で仲間と触れ合うことがねらい。	ネットを外し、台の間隔を離れた状態でダブルスのゲームを行う。21点制で行い、ルールは通常の卓球と同じ。台が遠いために生じる、通常の卓球とは異なるラリーの感覚を楽しむことがねらい。	卓球台を4台、横につなげる。通常のネットの代わりに、卓球場内に置かれている仕切りネット（通常のネットの2倍程度の高さになる）を置く。3対3でゲームを行う。一度ボールを打った人は連続して打ち返すことができない。ネットも高いため、経験者でもスマッシュを決めることは難しい。そのために生じる、広い台を走り回るという通常の卓球では味わえない感覚を楽しむことがねらい。

「内容については様々な案が出た。そのなかでも、とりわけ斬新なアイデアを実行しようとした。そこで、卓球台を4つ用い、中心で四角形をつくるように並べるといふ、卓球台の並べ方そのものを変えてしまうというゲームにチャレンジした。これは、なかなかいいアイデアだったと思う。」（1班・2年・女性）

「前半の講義で気付いたことや、女の子ならではの、男の人は強すぎて怖い等といった意見を出し合い、僕らのプログラムは試合を中心としたものとし、みんなが卓球の試合をだいたい同じレベルの人とできるように工夫した。」（2班・2年・男性）

「オリンピックの種目にもなっているスポーツであるのだから、洗練された形が今の卓球である。それを少し考えただけでよりよいものに簡単にルールを変えられるわけがない。そう思った。…私は現状のルールでやることを望んだ。」（3班・2年・男性）

「このプログラム作成にあたってはかなり悩みました。…どうしても飽きずにできるものを見ると、奇抜すぎてかえってよくないという意見になって、なるべくシンプルにという方向に向かいました。」

（4班・2年・男性）

「私たちの班は、わりと初対面の人が多かったのですが、アイディアは次から次へと出ました。…結局、…台を2つ3つとくっつけて、うんと大きな台で3対3でやるとおもしろいのではないか、ということで、この案で固めていくことに決めました。」

（5班・2年・男性）

5つの班のうち、3つの班が通常の卓球台の置き方を変更したゲームを提案した。2つの班は、通常の卓球のままの楽しみ方を志向した。いずれにせよ、「まったく初めての経験」（2年・女性）であったと述べた受講者もいたように、プログラムを作成する作業は、受け身ではなく主体的な関与を受講者に要請し、スポーツ実践の場の創造について深く考える機会を提供したと思われる。

2. 4. 受講者の授業に対するイメージ

受講者のレポートに見られる言説はイメージであり、実態ではない。しかしながら、この授業が受講者にいかなるイメージを想起したのかを見ることは、授業の価値を検討するための手がかりとなるだろう。

前半に、既知のゲームとしての卓球の技術、ルールを学び、後半にはそれにとらわれることなく実践の場を創造するという試みは、これまでほとんど体験したことがないということもあり、違和感を訴える受講者もいた。

「変則的なルールで卓球をやることには、私個人は反対である。というのも、私としてはただひたすら卓球をやりたいくてこの授業を受講したわけで…変則的なルールやプログラムの企画は予想だにしていなかったものである。」（2年・男性）

しかし、授業の目的は1時間目に説明済みであり、その趣旨を理解した受講者には、おおむね好意的に捉えられていた。

「普通に運動するだけの授業ではなくて非常におもしろい授業だと思いました。グループがあり、話し合いや卓球を通して、楽しい交流がもてました。」

（2年・男性）

「こういった形の授業をしたのは初めてだったが、とても良かった。普通のスポーツがぐっと楽しめたので、もしこれからスポーツをすることがあれば是非生かしたいし、スポーツとは関係ないところでも今回の経験は生きてくると思った。」（2年・女性）

「前半は基本的に基礎だったので面白いと感じることもなかった。しかし、後半は明らかに違った。一風変わった卓球にのめりこんだのを覚えている。」

（2年・男性）

「中学・高校と部活でやっていたけど、部活とは違う楽しさがあった。部活では本当にレギュラー争いが激しかったのでみんなピリピリしていてかなり緊迫した雰囲気の中でしか卓球をしたことがなかったけど、みんなで楽しくやるのも結構いいもんだと思った。」

（2年・男性）

「卓球というスポーツを本格的に行ったのは私にとって、今回が初めてでした。その上に自分達で授業を作っていくという経験も初めての経験でした。両方とも大変素晴らしい経験でした。」（2年・女性）

むしろ、「13回の講義も終わり、自分の卓球の技術も上がったと思いますが、今回の身体運動実習はスポーツを実践するまでの過程が重要だったのではないかと考えます。」（2年・男性）という感想のように、近代スポーツとしての卓球を相対化するための気づきを、この実践が導いたとイメージした受講者が多かった。

「普段とは違う形で卓球をすることができたということで改めて卓球の楽しさを感じる事ができたように思います。」（2年・男性）

「実を言えば、私はなまじ卓球のルールを知っているために、それ以外のルールを卓球と認めず、忌避していたので、このような場を通じてそのような偏見をなくすことができたのはとても喜ばしいことだと考えています。」（2年・男性）

既知のスポーツとしての卓球の実践のみでも、「初めての体験」のみでも、こうした気付きを導くことは困難であっただろう。ルールが「変則的」であるというイメージの背景には、既知のスポーツとしての卓球を最高の到達点とする妄信を読み取ることができる。スポーツとはいかなる文化なのかという点が教授されることなく、スポーツ実践を課せられるのみでは、現在のスポーツのあり方を相対化することはできない。よって、大学におけるスポーツ実践の必要性という観点から評価するなら、この試みには、スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を育むものとしての価値を主張することができるだろう。

3. まとめ

本稿では、大学におけるスポーツ実践の現代史を素描するという目的から、筆者が担当した卓球授業の実践を再構成することを課題とした。最後に、大学におけるスポーツ実践の必要性という観点から、歴史的事実としてのこの実践の評価を試みた。結果は以下のよう

- 1) 授業の目的は、スポーツの歴史被拘束性を実践の中から理解し、その主体的な継承のための構想力を育むことであった。この目的は、大学の要請と、スポーツ実習科目の必要性をめぐる議論の歴史に規定されつつ、筆者の主観により設定された。
- 2) 授業は次のように展開された。前半部では、卓球の基本的な技術を習得しながら、既知のスポーツとしての卓球が、いかなる歴史的位置にあるのかを学習した。後半部では、クラスを5つの班に分け、班ごとに卓球を楽しむためのプログラムを作成し、実践した。特に後半部は、主体的な関与を受講者に要請し、スポーツ実践の場の創造について深く考える機会を提供したと考えられる。

3) この授業の実践は、受講者に対して、近代スポーツとしての卓球を相対化するための気付きを導く契機となったと評価できる。以上から、この試みには、スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を育むものとしての価値が認められる。

スポーツ実習科目の授業実践に関する今後の課題として、歴史研究者の立場から以下のように付言しておきたい。スポーツ実習科目担当者は研究者である。よって体育・スポーツ科学の知見を直接授業に反映できる機会に恵まれている。いかなる研究領域であっても、科学的な研究成果に基づく知見は、受講者のスポーツに対する理解を深化させるはずである。今日のスポーツのあり方は、決して普遍的なものではない。よってそのあり方の模索については主体的な関与が可能である。筆者は、こうした歴史学から得られた知見を、大学におけるスポーツ実践からも伝達可能であると考えている。

註

- 1) 「大学におけるスポーツ実践」：本稿では、大学の中で実践されるスポーツ活動の総称を意味している。授業、課外活動を含む。大学のみならず、学校以外でのスポーツ実践の場を意識化するためにこの用語を用いている。

文 献

- 1) 九州大学全学教育機構，平成14年度全学教育科目履修の手引き，2002年，p.73.
- 2) 大熊廣明，わが国学校体育の成立と再編における兵式体操・教練採用の意味——明治・大正期を中心として——，筑波大学体育科学系紀要，24，2001年，p.68.

(平成16年6月12日受付)
(平成16年9月13日受理)